太閤記

中沢巫夫

古典文学全集〈18〉

太閤記

中沢巫夫

中沢巫夫
太閤記
ポプラ社　昭和49 (1974)
258p　23cm　(古典文学全集　18)
〔分類〕918

著者略歴

1905年，東京に生まれ，法政大学商科を卒業後，長らく官吏生活をつづけ，その間，文筆に親しみ，1934年文芸春秋オール読物の懸賞小説に当選。爾来，多数の歴史小説を執筆。
1944年，長編小説「阿波山嶽党」に歴史文学賞を受賞。現在，日本文芸家協会会員，日本児童文芸家協会常務理事。少年少女のための歴史小説の主な作品に「風雲天帝城」「明玉夕玉」「神変黄金城」「虎王丸」「義経物語」等多数ある。

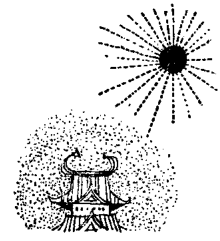
古典文学全集・18
(著者との話し合いにより検印廃止)
太閤記
編著者・中沢巫夫(なかざわみもお)
発行・昭和40年11月25日　初版©
昭和49年8月30日　15版
発行者・久保田忠夫
発行所・株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町5　振替東京149271番
活版印刷・新興印刷製本株式会社
オフセット印刷・有限会社　トラヤ印刷所
口絵原色印刷・株式会社　双美堂
製本所・石毛製本株式会社

はしがき

『太閤記』は、戦国時代の末ごろにまずしい農民の子に生まれた豊臣秀吉が、織田信長の心をうけついで、日本統一の大業をなしとげ、関白太政大臣という高い身分になった生涯の事跡を、物語に書きつづったものです。

戦争の記述が主になっていますので、戦記文学の一種とみられますが、秀吉という英雄の一生を書いていますので、伝記物語ともいえるでしょう。

豊臣秀吉は、日本人にとって国民的な英雄ですから、その伝記物語はたくさんあり、現代の作家までが、『新太閤記』というように、新しい伝記小説を書いているほどです。このように数多い『太閤記』の古典の中から、どれをえらぶかということになりますと、比較的首尾一貫している『絵本太閤記』ということになりますが、これは興味本位に書かれたもので、伝説やつくり話がおおく、伝記物語としては、秀吉の姿をゆがめすぎているのです。私は、少年少女に読みやすいように『太閤記』を書きあらためるのに、まず秀吉の人柄をよく伝えている『太閤素生記』や、小瀬甫庵の『太閤記』をえらびました。それが秀吉の身近の人の話であり、また秀吉の生きていたころをよく知っている人の著述であるからで、この『太閤記』も、真実にちかい秀吉の人柄を理解してもらうようにつとめました。本書を読んで、秀吉の人柄を、いっそう好きになる読者ができることを祈っています。

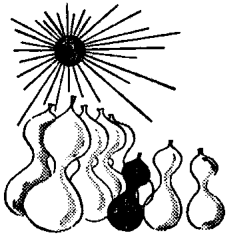


《目次》

第一章　日輪の子……一
悪童仁王の伊三次……六
小兵の知恵……一四
石合戦……二三
馬の党……二四
野伏山伏……三九
母の涙……五三
第二章　地にひそむもの……六〇
針の行商……六〇
日吉丸の元服……七〇
嘉兵衛尉のなさけ……八一
上総介信長……八八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本一の草履取り……九三
第三章　はげねずみ……九八
割り普請……九八
友情……一〇九
桶狭間合戦……一一五
まずしい結婚式……一二
たきぎ奉行……一二八
黄金の小柄……一三六
長短槍試合……一四三
第四章　日はのぼる……一五五
墨俣築城……一五五
信義の人……一六七
小谷落城……一七二
安土の春……一七八

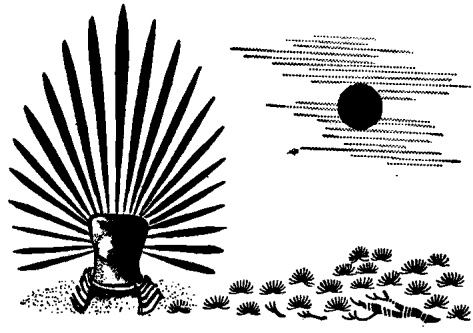


鳥取城攻め……一八六
高松城水攻め……一九三
第五章　日本の統一……二〇五
山崎合戦……二〇五
清洲の会議……二二五
賤ヶ岳の七本槍……二二九
小牧・長久手の戦い……二三〇
聚楽第行幸……二三五
解説……二三九
年表……巻末

装てい　新井五郎
さし絵
カット　難波淳郎

太閤記

中沢至夫



第一章　日輪の子

悪童仁王の伊三次

草の葉末にたまった露に、朝の光がうつって、きらきらとかがやいていました。

庄内川を吹きわたる風が、すがすがしいほどさわやかでした。

からだの小さな日吉丸が、大きなかごを背負って、川岸の土手の草刈り場にきたときは、もう日はのぼりはじめ、ひろい川原に夏の光がいちめんに明るくひろがっていました。

かごをおろして、よくといだ鎌で草を刈りとっていく手もとに、さくさくとこころよい手ごたえです。

草は馬の飼料にもし、また積みこんで堆肥にもするので、農家にとって、夏の草刈りはたいせつな仕事でした。

日吉丸の家では、継父が古渡の城の茶坊主をつとめているので、農耕をするのはお母さんと今年十歳になった日吉丸だけです。姉のおりょうは、ふたつ年長とはいえ、家事の手伝いがやっとですから、朝の草刈りは日吉丸の仕事になっていました。

からだが小さいので七つか八つぐらいにしか見えない日吉丸は、思いのほかに力が強く、小さいからだの二倍もある大きなかごにぎっしりと草を積めこんだかごを背負って歩いているところは、ありが死んだはえを引きずっているみたいでした。

庄内川は美濃（岐阜県南部）の多治見のほうから流れてきて、このあたりで大きく曲がり、伊勢湾へ流れこんでいます。草刈り場はちょうど川の曲がり角にあたり、川幅も川原もひろびろとして、夏草がよくしげっています。

清洲のご城下にいく旅人でしょう。もう川の浅瀬をさがしながら萱津のほうへ渡っていく姿がみえます。

今朝はすこし寝すぎたので、みんなよりもおくれていましたから、日吉丸は、わき目もふらず一心に草を刈りつづけます。

さく、さく、さく、さくと、ほんとうに気持ちのよい鎌の切れ味です。

「ゆうべよくといでおいたおかげだ。すこし寝坊したけど、このぐらいならきっとみんなとおなじころに帰れるかもしれない。」

ひとりごとをいいながら、刈りすすんでいきますと、ふいに、手先に黒い影がうつりました。

はっとなって、目をあげますと、目の前の土手の上に、大きな少年が、両足をふんばって、ぐっと日吉丸をにらみつけていました。

「やあ、おはよう。伊三次さん。」

日吉丸が朝のあいさつをして、にこにことほほえみかけますと、伊三次は目の玉をむきだすようにして、

「小ざる。なんだって、おれの草刈り場の草を刈るんだ。」

と、はげしくどなりつけました。

「おまえの草刈り場。なにをいうんだ。ここは中村の入り会い（その土地の住民が森林や原野にはいり、共同で利用すること）の草刈り場じゃないか。伊三次さんのものじゃないよ。」

「うるさい。ここは今朝早くおれがきて、縄張りしておいたところだ。いちばんいい場所だぞ。あとからのこのこきて、人の縄張りにはいるなんてずるいぞ。」

「おまえの草刈り場だったら、さっさと刈りはじめていればいいじゃないか。だれも手をつけていないから、おいらが刈っていたんだ。」

「うるさい。刈ろうとどうしようと、おれのかってだ。おれの縄張りから出ていかねえと、ひどいめにあわせるぞ。」

伊三次は仁王とあだ名されている村のがき大将で、年も日吉丸より三つも上ですから、だれよりも、からだは大きく、腕も、ふとももも、日吉丸よりふたまわりも大きいのです。

いつも、からだが小さく弱そうな日吉丸を、小ざる小ざる、と呼びつけてばかにし、いじめるのでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こんなやつとけんかをしてもしかたがないので、日吉丸はだまって、刈りとった草をかき集めてかごへ入れようとしますと、

「やい。おれの草はそのままそこへおけ。」

と、またにらみつけました。

「おれが刈ったんだい。」

「おれの縄張りの草をだまって刈った罰だ。おいていけ。」

日吉丸はしかたなしに、鎌とかごを持って、土手にあがりました。が、もうたいていのよい場所は、みんなほかの子どもたちが刈りはじめていましたから、日吉丸は、村はずれに近い川原へいって刈りはじめました。

ほかの人たちは、もうかごに半分ぐらいも刈りとっています。

日吉丸は、きっと、くちびるをかんで、またせっせと草を刈りはじめました。

明日から　お山のしおれ草
しおれた草をさっさと刈れば
草刈り鎌の柄が折れた
折れても　だちかんだちかん

世間にかじやはないものか
世間にかじやは六軒ござる
六軒かじやにみなうたしょ

川原の草刈り場では子どもたちが、口をそろえて草刈り歌をうたっています。

たのしそうな歌声ですが、ひとり、ぽつんとはなれている日吉丸は、だまって、しなびた顔を汗だらけにして刈りつづけるのでした。

やっと、かごはいっぱいになったので、ほっとして、鎌をとぎなおそうと、川原へおりていきますと、またも仁王の伊三次が近づいてきました。

「やい、小ざる。そこは稲葉村の地面だぞ。よその草を刈りとるとぬすっとに

なるぞ。おいていけ。」
「うるさいな。ここの川原は昔から稲葉と中村の入り会いだって、おっかさんがいっていた。だから、どっちで刈ってもいいんだよ。」
「おまえのおっかあなんか、御器所村からきたんだから、この村のことなんか知るもんか。おいらの家はな、中村の草分け百姓だぞ。中村のことなら、このおれがいちばんよく知っているんだ。」
いきなり、日吉丸のかごをひっくり返すと、せっかく積めた草をまき散らしてしまいました。
こうまでいじめられては、我慢強い日吉丸もだまってはいられません。
「仁王、仁王って、みんながいばらせるものだからいい気になって、弱い者いじめをするんだな。このひきょう者。」
「なに。ひきょうとはなんだ。どこがひきょうだ。おれは親切にいっているんだぞ。」
「親切があるんなら、人の刈った草を横取りするな。おまえこそ、泥棒じゃないか。」
「なに、泥棒だと。よくもぬかしたな。ちんちくりんの小ざるめ。」
仁王の伊三次はおこって、ふとい腕で、日吉丸をつかまえようとしました。
日吉丸はすばやく相手のうちぶところへ飛びこみ、相手のまたぐらを力いっぱいけりつけましたので、さすがの仁王の伊三次も飛びあがり、またぐらをおさえて、〈あいてて……〉と、うしろへたおれました。
このさわぎを見て、村の子どもたちがかけ寄ってきました。

「よせ、小ざる。かなやしないよ。やめろよ。」
「こんなやつをのぼせあがらせているのは、おまえたちだぞ。みんなが力を合わせれば、こんなやつをいばらせておくことはないんだ。」
「けがをしてはつまらないよ。やめろよ。」
「うるさい。どいていろ。やい、小ざる、なかなかやるな。」
またぐらをけられて、すこし腰をかがめながら、仁王はつかみかかってきました。
日吉丸はとび逃げましたが、仁王はながい腕をのばして、日吉丸のえりをつかみ、引きずりもどすと、にぎっていた鎌の柄で、強く日吉丸の頭を打ったので、日吉丸はうーんと気絶してしまいました。
「あっ、死んじゃった。」
子どもたちはおどろいて、わっと声をあげて逃げだしました。
仁王も気味がわるくなり、こそこそと、あとも見ずに走りだしました。
すぐ気がついた日吉丸は、額に手をあてますと、大きなこぶができています。
川原へおりて、顔を水につけていますと、痛みがうすらいだので、まき散らされた草を集め、かごにつめて背負いましたが、くやし涙がぽろりとほおをつたうのでした。
家では、日吉丸の帰りがおそいので、お母さんも姉さんも心配して門口に立って、外を見ていました。
「どうしたの、日吉。おでこのこぶは紫色じゃないの。」

「ころんで、川原の石にぶつけたんだよ。」
「ちがうでしょ。また、けんかしたんでしょ。さっき新田の弥作がかけてきて、仁王に殺されたっていってたわ。仁王とけんかしたのね。あんまり大げさだから、うそだろうと思っていたんだけど。」
「けんかなんかしないよ。仁王がいじめただけだ。」
日吉丸はくやしさをこらえて、馬屋へいきますと、継父の竹阿弥もお城からもどってきていて、馬屋には馬がつないでありました。刈ってきた草を馬のまぐさ桶へいれてやると、馬はうれしそうにいなないきました。
「あお。いまにおいら仁王をうんというめにあわせてやるぞ。力が強いばかりが強いのじゃない。知恵がある者も強いってことを見せてやるからな。」
馬へささやいていますと、お母さんがそっと近寄ってきました。
「日吉丸。もう仁王のことは忘れなさい。仁王は百姓の子です。あなたは侍の子です。侍の子は百姓の子などを相手にけんかなんかしてはいけません。お母さんを心配させないでね。」
「はい。」
お母さんは、ぬれた手ぬぐいをそっと額のこぶにあててくれました。
日吉丸はお母さんにとびついて泣きたくなりましたが、六つになった弟の小竹が、お母さんのうしろにくっついているので、やっと涙をこらえるのでした。

小兵の知恵

秋祭りの太鼓の音が、すみとおった空にはずみかえっています。村の鎮守の天王社の森には、祭礼ののぼりが高くたてられました。

村の子どもたちは、みんな晴れ着をきて、鎮守の社へ集まってきます。

田のあぜ道を通って、社の森のほうへいく人があとからあとからつづいていましたが、日吉丸は、この人たちを遠くにながめて、田にはいってたにしをひろっていました。

日吉丸の家はまずしいので、たにしをひろったり、川で魚をつったりして、おかずのたしにしていました。

たにしひろいをしている日吉丸の姿を見つけた仁王の伊三次は、

「小ざる、祭りにいかないのか。」

と、声をかけました。

草刈り場で気絶するほどなぐりつけたので、気がとがめたのか、そののちはあまり草刈りのじゃまはしませんでしたが、あれから二か月ばかりたったので、またなにかいいがかりをつけに、日吉丸をいじめようという気持ちのようです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com